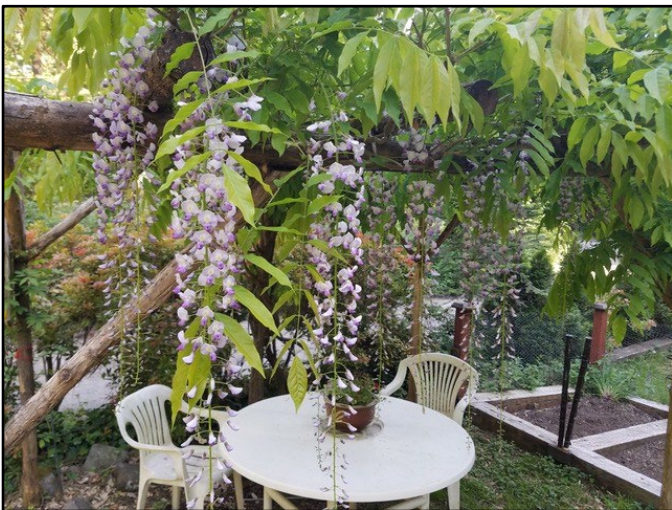


平素は、弊社商品にお取り組み頂き、
まことに、ありがとうございます。
月間通信 6月号をお送り致しました。
何卒、よろしくお願い致します。



『藤が咲いた』と連絡があった。長年咲かなかつたらしいから、喜びもひとしおだろうと思う。ところで、この花の群れは何というのだろう。菊なら一輪と言うのだろうけど、藤も一輪というのだろうか。ミニトマトも同じように軸を伸ばして其処に枝分かれするように花が着き、その花が受粉して鈴なりに実が成る。

そういえば子供の頃に好きで朝から晩まで、ついて歩いていた獅子舞が、そういう鈴の楽器を持って舞っていた。神樂鈴と言うらしいが、いつもあれを手してみたいと思っていた。ミニトマトの鈴なりを見る度にそれを思い出す。いやいや藤の話だった。我が家にも花はいっぱいあったが、藤は無かった。その代わり遊び場のひとつにしていた井伊家の玄宮園前の公園に広い藤棚があり、季節になるといつも花を咲かせ、その淡い色合いに見入っていた。

ひとは何によって成長するのか想像してみると、不思議と情緒、かもしれないと思う。不思議は好奇心に支えられ、情緒は感性に導かれているのかな。どちらもお腹は膨れないし、何の役にも立たないかも知れない。かも知れないが、それで価値無しとしてしまえば、この

国で育った人間の良さも消えてしまいそう。

新田次郎の息子で藤原正彦って天才数学者が著した『国家の品格』って岩波新書で、記憶は合っていると思うが、確か美しい景色が天才を育てるって書いていたように思う。それが真とすれば、好奇心と情緒は、直接利はないものの、触媒というか媒体というか案外ひとの成長に対する影響力は大きいと思える。最近よく無知は罪かと考える事がある。もちろん罪ではないと思っている。私が中学生のころタクシーの運転手等 4 人を殺害した死刑囚永山則夫が、その後獄中から『無知の涙』という書籍を出して話題になった。

私は本屋の息子として生まれ育った。もちろんそれを特典としてフルに生かしていた。漫画は読み放題。絵の好みはあるし、物語の好みもあるが、ほとんど読んでいた。最初に読んでいたのは『サザエさん』だった。読んでいたというより、最初は見ていたのだと思う。文字も知らない 3 歳くらいに読んでいて、6 歳上の姉に『文字も知らないのに笑っている』と、笑われたことが記憶にある。起承転結の四コマ漫画として優秀で、未だに現役の漫画の様に思う。いつだったかお客さんが東京の桜新町に店舗を出したので、挨拶がてら訪問したことがある。電車を降りて通りに出ると、そこは『サザエさん通り』と書いてあってびっくりした。若い頃の自分の頭の中の半分くらいは、漫画で得た情報で占められていた。

小学校の 3 年生のテストで、ボウルに水が張ってある図があり、そこに温めたガラスコップを逆さに入れると、ボウルの水面は上がるか下がるか、そのままかの三択の理科問題があった。横山光輝の漫画で、沼に沈んだ財宝を如何にすれば取り出せるかと、お殿さんが猿飛佐助に問うた。そうすると彼は竹で骨組みを作った大きな土の筒を作り、その筒を、薪をガンガン燃やして温めて、組み上げた丸太に逆さに吊るし沼に入れた。

そうすると、沼の水はその筒に吸い上げられて見事財宝が現れた。不思議がるお殿さんに佐助がこの理屈を説明した。したと思うがその理屈迄覚えていなかったが、現象だけは覚えていた。正解はクラスで私一人だったらしく、教師が何故分かったと聞いた。私は正直なので『漫画で読んだ』と返答したら、みんな笑うか、呆れるか、だった。今なら陰陽学説の原理と分かる。

逸れついでになるが、ある人物がお殿さんから『優秀な奴を連れて来い』と命じられ、佐助を連れて来た。お殿さんは『お前の得意技は何だ』と平伏している佐助に言った。スッと立ち上がり、お殿さんとの境にある襖が開け放たれた敷居の端に立った。そして、その敷居の上を逆の端まで歩いた。お殿さんは『なんだそれは、俺でも出来るぞ』と言った。私もそう思った。すると佐助は『自分はこの敷居が地上 100m の高さに渡されていても、同じように歩くことができます』と応えた。肉体は気持ちの動きに影響を受けやすいが、こんな理屈ではなく、既に恐怖心を知っていた私は『なるほどなあ』と思って記憶に留まった。

話を『無知』に戻すと、その書籍の感想をインテリっぽく振舞っている一人の仲間が、理屈を並べていた。私は読んでいなかったので、『ふ〜ん』と思って聞いていた。以来、無知という哀しさ、不条理について時々考えている。もし自分がこの地ではなく、砂漠に生まれていたらどうなただろう。自分を『私』とし、自分以外を『公』としたら、どこまでが私の責任だろうか。公の責任とは何なのか。いつも考えていても、切りがないし、答えは見つからないのでやめてしまう。今回もこうして書いていても結論に辿り着く事は無いだろう。

先日も自分が恥ずかしくなってしまう方に出会った。その方は最近密にしている企業の副社長だったので、その企業の畜産部の部長と農産部のバイヤーと食事をした戻り路、その話しをして自分もどうにかしないと、と思う話しをすると、部長は『今更、遅いですよ』と言った。もう無理でしょう という意味である。こうなってしまった責任が自分に無い訳ではない。むしろ環境に責任は無い。何故ならこれ以上無いという環境に育って来たように思う。柄にもなく、ひねくれている時期には、

『お前は素直さだけが取り柄だから』と諭してくれた年長の友達もいた。そのように思い出すと無知は自分にまったく責任が無い訳じゃないが、自分以外、つまり『公』の責任というのは大きく、自分もその『公』の一員であり自戒すべき立場にいる。

先の藤原正彦は父に新田次郎、母に藤原てい、という共に小説家の両親をもっている。新田次郎というひとは、たくさん本を書き、私が実家の手伝いをしている頃、そのどれもが売れていた。山岳小説がそのほとんどだったが、そういう自然に対して造詣が深い環境に育った人なのかな。数学者の天才というのは、岡潔氏も病に伏した留学先の友人の面倒を徹底的に見るなど、情緒の優先度が高そう。学問に於いても未開の領域に足を踏み入れるとは、そうした周囲のひとの如何、美しいと感じられる景色、これらが後押しして成果を得られるのではないかなと思う。

民主主義という、思想あるいは宗教は、個の力によって公を引っ張る制度が、言わば第二次世界大戦後の世界を形作る点で、支配者の支配効率を高める上で貢献したと思う。しかし、その限界が見えた時点でその思想・宗教も終焉し、ある程度支配・被支配が固定化される社会主義という名の君主制が敷かれるとすると、君主が倒れるまでは如何に公の質を高く保って行けるかがカギになるように思う。民が相争えば、君主の思うツボである。いつだったかイラストを掲載した Divide & rule とは、このことである。無知の存在を軽く、減らす、為には、公が民を代理支配する事ではなく、自分自身もその一部である公を、その共同性に於いて運用すべきだと思う。

思想は同時多発的に発生するが、思想が行動に移る時、必要なのは二次的な仕組みではないかと思う。思想が生産物を現実的にしても、その換金制度が無ければ恒常性に乏しく、一部のマニアになってしまう。その意味で『派』ではなく、普遍化する必要がある、そこに落ち着いたビジネスが成立すると思うがどうだろう。

有限会社アルファー：吉田清一郎